
宴のあと

nekokuti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宴のあと

【コード】

N68890

【作者名】

nekokuti

【あらすじ】

2010年に、バイオハザード的な大災厄が全世界を破滅させてしまった世界。

その後の年代記風の小説です。

ゾンビモノはあまたあるが、審判の日のあとのことが書いてある作品はなかなか少ないですね。

世界破滅後の数ヶ月後までは、それなりにアウトローな生活を楽しめるかもしれない。だが、旧世界の物資が尽き、人々が本気で自活

を考えはじめたとき、眼前に広がるのは廃墟と化した社会と、復興への光明などかけらもない暗鬱たる未来予想図のはず。人々が最悪の判断を繰り返し、人間の嫌な部分がMAXで発揮される地獄のなかで、人々は一歩ずつ、復興への道を歩んでいきます。そんな物語です。

私の小説を読むのに時間を割いてくださる方に感謝します。

宴のあと

どのような生物種でもいつかは寿命を迎える。

哺乳動物種族の平均存続時間は1000万年。人類の祖先が生まれて700万年。超越的な観察者がいるとすれば、いますぐに人類が滅びたとしても、その生はごく平均的な寿命を全うしたのだから何も文句はなかるう？とあっさり答えるかもしれない。

だが、その見方には異論があるだろう。原始的なアウストラロピテクスとクロマニヨン人を一緒の種族にするな、と。現生人類の直接の祖先が現れたのはわずか20万年前だから、人類は誕生間もない若い種族なのだ。

だが、超鉄的観察者ならこう答えるかもしれない。

超越者：「一つの種族の死なんてありふれたドラマじゃん。一緒にいいっしょ？」

それに、人の人生は長さで評価されるものではない。人生の評価はそこで何を成し遂げたかで決まるものだ。ならば、わずか1万年という時間的スケールで宇宙飛行まで成し遂げた人類は、地球史上最も成功した種族としてのタイトルを永久に守れるだろうことはほとんど確実だ。

超越者：「ほら、もういいんじゃない？生きてって、じゅぶん」

いやいや、ちょっと待ってくださいよ。そのオルタナティブはご勘弁を。

死ぬのは恐いが、自身と家族、国家、そして人類全体の未来予想図が余りにも厳しい場合、あなたなら”その後”の生を選ぶだろうか。それとも連中の一員になるだろうか。

2010年春（AC歴元年）

当初は”凶暴化”と呼ばれた異変の原因が何だったのかはわからない。

何かバイオハザード的な私企業による危険な実験？それとも増えすぎた人類の自浄作用？ひよっとしたら、天から下された最後の審判に落第したのか？

原因はわからず、結果だけが残った。

小さな島、人里離れた山間部、要塞化した堅固な建物に、数名から数万名の集団に分断された人類。

その年が暮れる頃には、人類の生き残りはごく一握りの小集団にまで減少していた。

”宴”が春先に起きたのは不幸だった。田畑は秋になってもほとんど実りをもたらさず、旧世界の遺産である保存食が専ら生存者の胃を満たした。

飢えた人々はスーパーマーケットを掠奪し、掠奪の過程で”奴ら”と接触し、安全なはずのシェルターにも死をもたらした。そんな環境で生き残ったコミュニティーは、どれもごく小規模なものだった。

A・C・4年

桐生 - 伊勢崎連合国軍は、邪悪な人非人の日系ブラジル人と戦って

いた。

日系ブラジル人の支配する聖マリア共和国では、純血の日本人は奴隷のように扱われ、改宗ののちに二級市民として虐げられている。正義を愛する我が連合国は、非道な聖マリア共和国に宣戦を布告した。

もちろん、要塞化した工業地帯を有する敵は強大だ。富士重工太田工場は、今も日本人奴隷の手によってパイプ銃を量産している。その火力で、いずれやつらは関東地方を支配してしまうかもしれない。そんな邪悪な野望は阻止しなくてはならない！

- - - - -
- - - - -
- - - - -

桐生軍中隊長、佐藤靖男は元電気配線工だった。やつれた顔に無精ヒゲを生やし、ヒビの入ったFRP製のヘルメットは血と泥で汚れていた。

元は自動車修理工場だったコンクリートの基礎に潜み、ホンダのガソリン発電機の唸りに負けぬ大声でWEBカメラに向かい叫ぶ。

「大隊長、要塞のB区域突破は無理です。2メートルのコンクリート壁がそのまま残っています。自爆トラックが立ち往生したので
す」

LANケーブルと無線LANで構築された簡易通信網で、戦場の様子は逐一報告できる。大隊本部のパソコン画面にも、B地区の様子は明らかにはずだ。

一拍おいて、スピーカーから大隊長とは違う人物が答えた。

「工兵が悪いと言いたいのか！敗北主義は銃殺だ。わかっているだろうな。お前の大隊長は突撃して勇敢に死ねと命令している。以上」

佐藤は、マイクに拾われないように小声で悪態をついた。

「クソッ。あの野郎」

通信兵が早口で、「中隊長、あれに突撃したら全滅ですよ。見てください」

見るまでもない。トラックはあと少しで要塞壁というところで、陥没罫に引っかかって横転していた。

折り畳み机に載せられた小さなFMトランシーバーからは、怒鳴り声と悲鳴、そして粗末な空気圧銃のポスポスという発射音が漏れていた。それが、各小隊に一個ずつの貴重なトランシーバーからの現状報告だった。もちろん、携帯電話などとくに使えなくなっていた。

「第4と5小隊がトラックの影まで進出、あとは手前の小川に隠れています」

小川の深さは50センチ。だが頭を守る50センチだった。敵兵の持つ火薬式のパイプ銃は射程も威力も倍以上だ。とても戦えない。だが、後退することもできない相談だった。後退などしたら、保安部隊に捕まって無許可離隊の罪で銃殺される。進むも地獄、退くはもつと地獄だ。

15キロ北西の桐生には、家族が待っている。眉根を寄せて配給クーポンを数える妻の姿がフラッシュバックした。かつてなら車で国道50号線をとばせば20分もかからなかった故郷は、今ではとても遠く感じられた。

「中隊長よ……」

「うるさい」

頭上のスレート板の壁にポツポツと穴が開き、地面に破片が散った。

佐藤は無言で横転したアセチレン爆弾トラックを見て、味方歩兵が隠れるトラックの荷台にアセチレンボンベが固定されたままののを目にした。そして、きつく結んだ口から搾り出すように命じた。

「銃をくれ。本物の方」

通信兵は何も言わずに、貴重な本物の自動小銃を差し出した。

近くの立木にも聖マリア共和国軍の銃弾が命中し、木片が飛び散った。

廃工場の壁ぞいに積み上げられた大谷石のブロックは、1メートルほどの高さにも3センチほどの隙間があいている。もちろん、銃眼だ。

どこかの補給処から手に入れたのか、木製ストックの、元は自衛隊の自動小銃はとても重い。食糧不足でやせこけた体にはきつい。膝の肉が落ちてきているから、やけに地面の砂利がくいこんだ。

サイトを立て、単発をセレクトする。作戦発動前に振舞われたアルコールの威力を借りている小隊の兵と違い、佐藤は素面だったが、今はそれを後悔していた。

距離は200メートル。微風。的はトラック一杯の茶色っぽいボンベ集合装置、充分に当たる距離だ。

通信兵は心配そうにこちらを見ている。

「清水、全小隊に通信。頭を低くするように伝える。チャンネルは2だ」

わざわざ命じられるまでもなく必死に頭を低くしている兵たちは、この命令をさぞ不思議に思うことだろう。だが、そう考えても少しも面白味は感じられなかった。

送信を予告する電子音の後、清水は命令を繰り返した。

佐藤は息をつめ、サイトの真ん中に映る茶色の物体に向け引き金を引いた。空気銃とは比べ物にならない重い射撃音と同時に、トラックにオレンジの火花が散った。反射的に瞼を閉じたが、予期した爆発音がない。トラックの陰では、第4、5中隊の男たちのヘルメットが、ヒョコヒョコ左右に揺れている。

もう一度、狙いを定める。この二発目は精神的に更にきつかったが、銃弾は狙い変わらずボンベを破壊した。トラックが白い火球に飲み込まれ、次いで雑多なゴミのようなものと一緒に宙を舞った。衝撃波が立木の葉を吹き飛ばした。小隊の兵たちが頭を上げたとき、L字型の要塞壁が数個倒れ、壁に隙間が開いていた。

敵も、突然の爆発に驚愕している今がチャンスだった。トランシーバーを取り上げると、佐藤は命じた。

「中隊、突撃！」

A・C・ 39年

今にも臨終を迎えそうな傷だらけのコンバインの後ろを、檻褌をまとった女たちがぞろぞろと追いかけていた。米の一粒は血の一滴。そう叩き込まれている女たちは、日が暮れるまでお館様のコンバインが取りこぼしたおこぼれを奪い合っている。

少女はスカートの裾を持ち上げて琥珀色の朶を溜めこんで、一粒もこぼさないよう慎重に家に持ち込んだ。

「父ちゃん、今日はいっぱい拾ったよ」

結衣は無言のまま背中を向けている父から、母に視線を転じた。

「母ちゃん、落穂税で半分取られたけど、ほら、こんなに」

母親の口元から、ツーツと涎が糸を引いた。彼女には食欲だけは残っていた。

結衣は眉をしかめて寝たきりの母親を見下ろした。お館から暇を出されて家に戻ってきた6年前から、病気は段々ひどくなっている。母ちゃんがせっかく帰ってきたのに、病気になっていたのはとても残念だった。

「無駄口を叩くな。もう電気消すぞ」

父親が乱暴にスイッチを叩くと、古ぼけた、半導体素子がむき出しになったLED電球が消えた。この電球は、父がそのまたお父さんから引き継いだものだ。聞いた。今年16になる結衣には、それが自慢だった。電気で光る道具は郷のなかでは他にお館にしかなかったし、電気が通っているのもうちくらいのものだ。これも全てお館様の格別の配慮があつてこそのものだと、父がいつも言っていた。いつか郷の学校で見せてくれた大昔のビデオテープで、”宴”の

前の奇妙な時代のことを教わったことがある。結衣の郷で一番偉いお館様は、昔の”ニッポン”という郷で一番偉かった”ソウリダイジン”と同じなのだそうだ。その難しい言葉が何を意味するのかは良くわからなかったけど、とてもとても偉いということだけは繰り返し教えしてくれた。

口を半開きにして、ノイズだらけの液晶画面を眺める子供たちにとって、それは別世界の神話と同じ。画面の中では、大昔に死んでしまった紺色の服の男たちが、かつては重要だった何かを深刻な表情で語り合っていた。

16になつてすぐ、結衣は初潮を迎えた。他所の子よりも少しだけ早く大人の女の仲間になれたことに密かな喜びを抱かなかつたと言えば嘘になる。忌屋に初めて出入りして、学校で同じ齡だった子を見かけて昔話に花を咲かせた。年上のおばさんたちの多くとも、落穂拾いで顔見知りだった。あそこでは競い合っていたけど、この忌屋ではなんとなく味方のように感じられるのが不思議だった。

忌屋から家に帰って半月が経った。

ある朝、起きてみると母ちゃんが死んでいた。痰が喉につまつたのか、それとも単なる老衰か。でも、まあいい。母ちゃんは働けないう穀潰しだったから。それに、忌屋のおばちゃんが言っていたけど、母ちゃんは”性病”にアタマをやられていたみたい。

父ちゃんが知らないかもしれないので、さっそく新たに詰め込んだ言葉の一つを口にしてみた。

「フランって知ってる？死んだらフランするんだよ。もうお昼だし、早く母ちゃん捨ててこないと。ねえ、父ちゃん聞いてる？あ、母ちゃんのアタマだけはとくにフランしてたっけ」

とても賢くなった気がして、結衣は頬を上気させてまくしたてた。振り向いた父の顔は、白いを通り越して青かった。

「と、父ちゃん？」

「お前の母ちゃんは31だ。まだ31歳だったんだ。なのに、こんな……」

父親の瞳には、結衣が生まれて初めて見る涙が浮かんでいた。結衣は心臓を悪魔に驚掴みされるような恐ろしさを感じた。

父ちゃんのお髭はこんなに白かったっけ？

まるであかの別人をのぞきこんでいるような居心地悪さに、鳥肌が立った。彼はぶつぶつと、「お館様」、「滅びろ」、「何もかも」と何度も呟いていた。

「ちよつと、父ちゃん痛い」

父親は覆いかぶさるようにして、鉤状に強張った指で結衣の肩をつかんだ。

「教えてやるよ。ああ、結衣。お前にもお呼びがかかったんだ。光栄か、ええ、どうなんだ」

「お呼びがかかったって……」

父親の顔に浮かぶ表情を見て、結衣は顔を背けた。結衣の頭上では、天井からぶら下がるLED電球がゆっくりと揺れていた。

「館に呼ばれることの意味くらい分かるだろう。お前の母ちゃんもそうだった。お前を産んで直ぐに連れられていった。10年だ。そう、10年もあの糞蛆虫に。ニューロウィルスまでうつされちまって。ああ、そうさ、お前の母ちゃんを売ったのは俺だよ。喰われてしまうがいい。何もかもが」

「お前は大事な大事なおコメ25キロの価値だそうだ。母ちゃんはLED電球、お前は米。たったのそれっぼち！」

荒い息づかいを狭い小屋に響かせて、頭上で揺れる電球を睨んでいた父が、ゆっくりとつつむき、結衣の顔を正面から見下ろした。そして、やおら結衣の両足の間に膝を割り込ませてきた。

「父ちゃんなにを。やめてよ、やめて！」

父親は無言で結衣の上着を引き裂いた。粗末な家の板壁から漏れる秋の陽光に、襪履から舞ったほこりがキラキラと輝いた。

「連中に取りられるくらいなら……いつそ……」

しまいだった。合衆国や英国の政府が避難していた巨大空母は、とつくに海底の墓標となっていた。

油井は動力の供給がなければ自噴井戸でない限り採油できないし、石炭などの鉱物資源の大部分は、採掘しやすい地層を20世紀までに掘りつくしていた。いま地球上に残っているのは、強力な機械類がなければ採掘できない資源ばかりだ。

だが、” 奴ら ” の最後の一個体が蠢きを止め、世界から ” 宴 ” の熾き火が消えたのもこの頃だった。人類に、再び増殖し地に満ちる条件が揃ったのだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

オキナワを巡る聖戦が、いつ始まったのか。それを知る者はもはや一人も生き残っていない。” 宴 ” の直後、チャイナという悪の帝国が放った ” 勃火 ” が、今のマリンスフォース王国の辺りを吹き飛ばして我々が弱ったときのこと。オキナワに逃げ込んでいたイエローの頭領ハトヤマが卑怯にも内乱を起こした、という断片的な歴史が伝えられるのみだ。

一時はキャピトル・ナハ付近まで攻め込まれたマリンスフォースだったが、神のご加護のおかげでハトヤマ普遍友愛軍を撃退、今ではイシカワ以北にイエローどもを駆逐した（マリンスフォース王国に栄光アレ）。

軍の平時における任務とは何か。少なくとも王国において、それは黄奴管理にある。王国の支配体制は、古代ギリシャのポリスになぞらえられる。神に聖別された優等人種として、その他の劣等人種を支配する。この任務は、 ” 宴 ” がはじまったそのとき、天を割って降り注いだ死の光が地上を焼き、地上のイエローどものほとんど

を抹殺することで顕示されたという。

王国に仕えることは神に仕えることと同じ。神に奉仕し服従する喜びを理解できるだけの知恵があるイエローには、生存の権利を付与する。そのための選別作業が、クリスチャン軍の任務だった。

鍛造した甲冑で身を覆った聖なるクリスチャン軍の兵士は、イエローたちの集落を襲い、仕えそうな若い男女を連れ去った。老人の首は斧で叩き切り、赤ん坊は足をつかんで地面に叩きつけ、脳を粉々にした。

軍が任務に精励した結果、王国内におけるイエロー人口は着々と減少しつつあった。少なからぬイエローが密かにハトヤマ領に脱出しているとの見方もある。それはつまり、イエローの連中は矯正し難い劣等人種であることを自ら実証しているだけのことだ。いずれは北部のハトヤマ領も叩き潰される。そのとき、正しい神に自ら奉仕する喜びを知らぬイエローの残党は、ことごとく始末されるだろう。

みすばらしいイエロー居住区は、大抵の場合においてマリソフォース王国の人目から隔離された僻地に押しやられている。理由は考えるまでもないだろう。見苦しいからに決まっている。

ある日、金城一郎が暮らしてきた集落は掠奪され、放火され、よく見知った男女が連れ去られた。蛇蝎のように嫌われ、恐れられている王国軍は、密かに集落に忍び寄って襲いかかったのだ。

金城たち一行は襤褸をまとい、裸足で逃げ、かろうじて助かった。だが、逃避行の途中でボウガンの傷が悪化して一人が脱落し、もう一人はハブに噛まれ、置いていくしかなかった。金城の弟は、集落を焼かれて1週間余りで、腹をパンパンに膨らませて死んだ。

子供たちばかりの生存者は、緑に覆われた山を川沿いに北上していた。狭い川原は密林に飲み込まれそうだった。

彼らは、北には同胞の王国があると、大人たちから聞いていた。今は、そこに行くしかない、金城は皆を説得したのだ。

「あと少しだから頑張るんだ。もうすぐそこだ」

これまで集落からこれほど離れたことなどない。実は金城にも、あとどれくらい歩けばいいのかはよくわかっていなかった。

「お兄ちゃん、足が痛いよ。お母ちゃん」

金城は、グズグズ泣きだした少女の髪をつかむと乱暴に引っ張り上げた。

「うるさい。黙るんだ。お前の母ちゃんは死んだ。お前も兄弟みたいになりたいか馬鹿野郎」

少女の蒼白な顔を、大粒の涙が伝わった。彼女の兄弟は王国軍に捕まり、焼き殺されていた。

子供たちの中で一番年長の金城がしっかりしなければならなかった。

金城も怖かった。これから逃げようとしている鳩山王国も楽園とはほど遠いという噂だった。国教の普遍友愛教がどんなものかは、大人たちが小声で話す内容のかけらを聞いただけでも、吐き気がするような代物だし。生贄を生きたまま切り刻んで、皆で賞味するという普遍友愛教が、まともとはとても思えなかった。

少女は、ついにしゃがみこんで両手を地についた。

「鳩山領に入れば、大人たちが助けてくれるんだ。だから歩くんだ」

そうであって欲しかった。

機械的に歩き続ける仲間たちが、金城と少女を追い越していく。まるで目に入っていないかのよう。

「どうしたいんだお前。え？何がしたいのかって聞いてんだ」

金城が少女の頭を殴ろうと拳を振り上げたそのとき、近くからくぐもったうめきが漏れた。ぐえ、という声と、甲高い悲鳴が同時にあがった。

先に行っていた少年2人の顔に槍が突き刺さっていた。廃墟から拾ってきたパイプを斜めに断ち切っただけの粗末な槍でも、人を殺すことができた。倒れた少年の一人は、まだ足をびくびくと痙攣さ

せていて、その横では10歳くらいの少女が悲鳴をあげ続けた。
密林の中から、同じ顔をした男たちがぞろぞろと現れた。槍や蛮
刀を手にして、死んだ眼をした男たち。

「やめろ！俺たちはマリンフォース王国から逃げてきたんです。
助けてください」

男たちの一人が重たそうな蛮刀を振り上げ、まだ悲鳴をあげる少
女の頭に振り下ろした。

悲鳴が途絶え、耳が痛いほどの静寂が訪れた。

「俺たちもマリンフォースから逃げてるとこだ」

男は訛りの強い口調で答えた。少女の頭に食い込んだ刀を引き抜
き、刃こぼれを確認していた。

「じゃあ仲間ですよ。殺さないで」

男たちは唾を吐き捨て、金城の数歩先で震える少年に突進した。
慌てて逃げ出した少年の背中に、深々と槍を突き立てた。

「関係ねえな」

集落を逃げ出した時には10人以上いた子供たちは、たった二人、
金城と、傍らにしゃがみこむ少女だけになってしまった。

男たちは、興奮のために荒く息をしながら、薄笑いを浮かべてい
る。そのとき、密林の奥から女の声が出た。

「殺せ、殺せ、あんた、殺しておくれ」

鳥の巣のようにチリチリの髪を振り乱した中年の女がわめいた。
何人かの女たちが、木立の奥の日陰から、金城たちを睨んでいた。

「なんで、なんでだよ」

いちばん大柄な男が、蛮刀の背で掌を叩きながら、ゆっくりと近
づいてきた。

「なんでか、だと？ムカつくからだよ。俺たちの集落じゃ、一人
残らずガキどもが殺られちゃったのに、お前のようなガキが生きて
るんじゃないよ。お前達だけ生きてたんじゃ気が済まねえ」

「仲間じゃないか。同じイエローじゃないか。クリスチャン軍の
糞つたれに復讐しろよ！」

金城は裏返ったキンキン声をはりあげた。

「はあ？あいつらにかなうわけない。だからお前達に身代わりになってもらう。いいから死ねよ」

大柄な男は、何を馬鹿なことを、と言いたげだ。

「あんたら腹いせで俺たちを・・・ちくしょう」

5人の成人男性は、素早く金城を取り囲んでそれぞれの武器を構えた。そして、一人の男が、哀れむような眼差しで金城と少女に告げた。

「まあ、その娘は生かしてやるよ。向こうで生贄を差し出さなきゃならんからな。だからお前さんは俺たちの子らと遊んでやってくれ。きつと、あの世で寂しがつてるからよ。お友達になつてくれや。な」

金城は足に力が入らず、その場にへたりこんだ。

大柄な男が蛮刀を振りかぶると、太陽が刀で隠れた。そして何もわからなくなった。

A・C・192年

「大僧上様の仰せの通りに」

北海道統一教会の謁見室は、美しく磨かれたクヌギが目立つ落ち着いた部屋だった。天井は高く、天窓の両脇を石造りの柱が支える。謁見室の主は、札幌教区の最高権力者だった。本来なら、従五位僧に過ぎない田中誠太が会えるお方ではない。

「いいな、神聖日本国再興のため、神聖日本統一に奉仕する技だけだ。その他は一切認めん。そなたの過去の行いの調べはついておる」

大僧上様は軽く首を振る動作をした。

「間違っても、禁断の技に触れぬよう」

簡潔に命じると、大僧上様は長大な法衣を振り、退がるよう指図する。田中の姿が視界から消え、重々しい扉の動きが止まったとこ

るので大僧上は溜息を大きく吐き出した。

彼の背後の薄暗がりから湧き出すように、やけに長身色白の男が出現した。

「……………お疲れ様で御座います。大僧上様。お疲れで？」

「ふん、まあな。ああいう類の男は疲れる。軍の連中など放っておけば良いものを。狂信者め」

男は小鳥のような笑い声をあげる。

「いやはや、いけませんね。統一教会の存在意義に関わりませんぞ」

「ふん、わしに教会正統教義の説教をする気か？青臭い事を言ひ出すんじゃない」

大僧上は鼻を鳴らすように笑った。いや、鼻を鳴らしただけかもしれない。いつもニコニコしている老人だが、それ以外の表情が作れなくなっただけの老人なのか。

「あの男、ええと」

「田中」

「ふん、田中だ。今言おうとしておったのに」

「申し訳御座いません。で、その田中がいかに」

「アレをアレしろ。決してアレなことにならぬようアレにな」

「承知しました」

男は軽く頷いた。

「統一は皆の心に」

「心に」

大僧上と長身の男は、そう和してからそれぞれの仕事に移った。

田中誠太は若い頃から変わった青年だった。割と良い家系の出だというのに、軍人にも僧侶にも興味示さず、廃墟の探検ばかりしていたからだ。彼の実家の倉庫には、得体の知れない薄汚い機械が山積みになっていた。田舎のことだから、田中家には悪い噂が流れ、ゴミ屋敷と呼ばれるようになった。

この奇癖のために彼は実家を追い出され、寺院に放り込まれた。

当初は落ち込んだ彼だったが、やがて僧侶の身分が意外と使えるものであることを知ると、精力的に熱心な説法をして上位階の僧侶にゴマすりできるようになった。なぜなら、過去の政治的綱引の結果、過去の遺物に関する禁忌の設定権限と捜査権限が宗教界に任じられるようになっていたからだ。

田中は”禁忌技術が放置されていないか調査する”という名目で、給料を得ながら合法的に遺物探検ができる身分になったのだ。ある年に彼が一線を踏み越えてしまうまでは。

彼は”宴”以前の”書物庫”を発見し、それを通報しないばかりか、隠匿していたのだ。

彼は僧侶の位階の暫時停止処分を受けた。だが、またもや政治的状況が彼の経歴を救おうとしていた。北海道政府が首までどっぷり漬かった負け戦が、一発逆転できるオーヴァーテクノロジーを欲していたからだ。これこそ、彼の望んでいたチャンスだった。

「北、海、道、大、学」

田中は、ここだ、と呟いた。すっかり朽ちた名板に、かろうじて文字が読み取れた。ここは、田中がずっと訪れたいと願う聖地であった。

前世紀の酷い冬、燃料になってしまった本は数知れない。だけど、ここだけは”邪神クラークの呪い”を恐れる無知な農民たちの頑迷さのおかげで燃料にならなかった、という伝説があった。もしそれが本当なら、この書物庫は略奪者に汚されていないということになる。

ここ、札幌教区は総本山の頂上に登りつめる有力者が任期を勤めることで知られる豊かな教区だ。ここでたんまりと私服を肥やすのが、教皇の高みに至るには必要なのだ。普通なら、田中がここで廃墟探索を願ったところで門前払いを食らうだけだっただろう。

空は曇天。この辺りは下生えばかりの雑木林に覆われている。

エゾマツの枯れ葉が積もり歩きにくい。しかし、心を満たす高揚

が歩みを軽くしていた。呪いがなんだというのか。彼はとつくに意を固めていた。幼いころ、田中家に代々伝わる宝物を手にしたあの時から。

かつて偉大だったわれわれ人類。だが、少年田中が日々目撃してきたのは、地主に肉体ばかりか魂まで支配された落ちぶれた農民の姿だった。地代の支払いを待つてもらおう代わりに、地主だった田中の父親に自らの娘を売るような連中がたくさんいた。

昔、人は地を飛ぶように走り、海を越え、天空の星々まで行ける船まで造り上げたという（田中も最後の船の件については眉唾だと思っていたが）。偉大だった我々が、かつての同胞を不倶戴天の敵として、境を分けて殺しあうとはなんとたる落魄ぶりか。

ふと、捻じ曲がった灌木の向こうに、緑青がふいた胸像が見てとれた。半ば枯れ枝に埋もれるように。こっけいにも胸像の頭に積もった塵を養分にして、痩せこけた小さい松が育っている。

え？もしかしてこれか。邪神クラークって……

邪神という響きに全く似つかわしくないしよぼくれた胸像。田中は笑いの発作に襲われた。あまり鍛えていない太った体を揺らして笑い続けた。彼の背後に忍び寄る男たちの影に、全く気付かぬまま。しばらくして、雑木林にこだまする笑い声は不意に途絶えた。こうして、クラークの呪いに新たな犠牲者が加わったのだった。

A・C・346年

1世紀にわたって続いた戦国時代を経たのち、現実主義と公益主義が市民レベルで浸透しつつあった。相次ぐ独立封建領の連合と離散はやがて大きな領域国家を産み、失われたテクノロジーの軍事分野を中心とした再生がみられた。

国家連合による安全保障体制は、A C 4世紀初頭には日本列島の大部分を包含する統一政体へと、概ね平和裏のうちに発展的に解消した。こうして”宴”の負債は徐々に返済されていた。

かつて鉄とガラスの巨塔が聳えたという大都市の廃墟、その朽ち果てた足元に小さな露店が現れ、もはや軍閥の収奪に怯えることなく商売に精をだしていた。廃墟に転がる錆付いた鉄製品は、あちこちの原始的な転炉で精錬され、農具などの実用品にリサイクルされた。

遠方の村々との物々交換が活発化し、新貨幣制定と度量衡統一によって物流はますます盛んになった。獣道のような細道は馬車が通行できる街道へ、そして2車線の整備された国道になった。

かつて瓦礫だらけだった土地は原野に戻り、やがて農村の余剰人口だった次男、三男がそうした土地に流入し、苦労しながら豊かな耕地に変えた。人口は世代ごとに倍に増加し、西日本では100年で5倍にもなった。

今や再び、日本列島は人満ちる国になった。その総人口、およそ800万は世界有数であった。

- - - - -

たくさんの路面動力車が、接電線から火花を散らしながら行きかう大通り。新大阪、京都といった日本の中心部では、もはや見慣れた光景だ。

志賀原子力発電所2号炉の再稼動と送電網の部分的再建に成功したことで、今では電力だけはふんだんにある。300年以上も前の遺物は、なぜかほとんど稼動しないまま停止状態にあった。そのため、燃料棒もほとんど放射性壊変することなく保管されていた。この炉が沸騰軽水冷却水炉だったことも、現文明の技術力を以って再稼動させる上でのハードルを下げたことだろう。

今後、各地に50ヶ所以上も確認されている原発のうち、いくつかは再稼動できるだろう。いや、しなくてはならない。なぜなら、志賀原子力発電所2号炉が生み出す130万キロワットの電力だけ

でも、今日の日本の全電力需要を賄えるほどだからだ。原発再稼働は、社会を根底から変える力を持っている。それらは日本の発展に必要な不可欠な財産となろう。

それにしても、”宴”以前の人々はどれほどの贅沢を当然のものとしていたのだろうか？

想像もできなかった。

高橋耕三は、新大阪の雑踏をイライラと足早に歩いていた。

エラが張った旧天原〓九州人、大柄な北海道人、青い瞳のマリンフォース人。日本の首都では、かつての敵国人が当然のように生活し、日々の生活を少しでもマシなものにしようと懸命に働いていた。もはや多くの男たちから戦争の記憶は遠く去り、動力車にうまい具合に轆かれずに大通りを走り回る子供たちの多くは、統一後の生まれだ。いわゆる戦後のベビーブーマーの子らである。

仕送りに頼れない典型的な苦学生である高橋にとって、貧乏は敵だった。そして、かねがね清貧などという概念は金持ちにしか存在しないと喝破していた。

彼の実家は貧乏だった。いや、かつて彼が住んでいた武蔵野軍閥のどこに行っても似たような生活水準だから、それが普通の状態だった。思い出すのも嫌な過去の記憶。そこから逃げるように上京したのは一昨年のことだ。

この夏休みの間は、友人であり、”宴”前後の近代歴史学を専攻する学生でもある青年と一緒に日雇い仕事に取り組んでいた。そして、単調な作業の合間に、友人は高橋を諭すように、これから訪れる素晴らしい時代の事を語って聞かせた。

曰く、

「階級再編成と科学技術の発達は、この地上から貧困をなくす」

「居間にいながらにして地球の反対側の事象を知り、知識は幾何級数的に増大する」

「食料は存分に行き渡り、望めば誰にもに教育の機会が与えられる

社会が到来する」

はじめは夢物語と笑った。だが、彼が示す過去の事例は、具体的かつ詳細だった。まるで、東京や大阪といった滅びた町が実際に存在するかのように語った。明るい未来の到来に絶対の自信をみせた、あの笑顔。

高橋は、彼にもう一度説得して欲しかった。同胞とその子孫たちが享受するだろう豊かで安全な社会のことを。

大通りから小さな路地に入ると、そこには不潔な溝の匂いがした。もう、すぐそこだ。

友人が借りている長屋のドアを叩くと、耳を澄ませた。中からはコトリとも音がしない。いや、咳き込む音がした。

「俺だ、高橋だ。話したいことがあるんだが、いいか」
部屋から、しわがれた声が入れと告げた。

薄暗い室内の真ん中に、友人はいた。痩せた体を更に痩せさせて。友人は、いつもの癖で髪をかき上げると、指に絡みつくように抜けた大量の毛髪を呆然と眺めた。

その光景は、高橋の脳裏にある記憶を呼び覚ました。

統一戦争末期の武蔵野は地獄だった。

新型の火器と蒸気船を振り回して、祖国統一に邁進する新生日本の勢いは本物だった。だが、武蔵野軍閥の独裁階級は、軍事的恫喝に屈する気はまるでなかった。戦時体制が敷かれ、17歳以上の成年男子が根こそぎ動員された結果、農業生産は滅茶苦茶になった。

村々にはおびただしい徴税吏が押し寄せ、米の最後の一粒まで持ち去った。そして、そこまでしておいて、結局は併合を受け入れることになるのに無駄な抗戦を説き続けた。独裁階級には、どのような不幸が住民たちを襲っているのかなど、気付きもしなかったのだらう。

高橋の家は子沢山だった。三男の耕三の下にも4人の弟妹がいた。8人の子供たちが、どうやってもその冬を越せないことがわかると、

ある秋の日の昼下がり、母親は末娘だけを手元に残して、残りの子らを近所の親戚の家に遊びにいかせた。でも、耕三は忘れ物を取りに家に戻った。戻ってしまった……。

戻ったときには、お夕エという名の可愛らしい妹は、もうこの世にいなかった。板戸の奥で展開する地獄絵図のことを知っていら、戻るはずはなかったのに。

母の能面のように無表情な顔には血痕が飛び散り、一心に何かをむしっていた。そう、切断した末妹の頭を塩茹でして、その髪をむしっていた。三和土にひかれた藁藁の上には、いつも野菜を洗うのに使っていた見慣れた桶に、なみなみとした鮮血。そして、傍らには、いつも見慣れた妹の、色白な胴体。

口に拳を押し込んで、耕三は悲鳴を押し殺した。心臓は早鐘を打ち、視界が軽く歪んだ。そして、拳に歯を食い込ませたまま、ゆっくりと後じさりする少年のかかどが、小枝を踏んだ。

乾いた音が響き、艶やかな長髪をむしる母の手が止まった……。

友人は寂しそうに言った。

「実は知っているんだ、この症状を。君はどうなんだ高橋」

「ふらふらするんだよ。お前はどうかと思って、駆けつけたんだ。一体、何がどうなってるんだ」

突然こみ上げた強烈な吐き気で、高橋はその場に膝をついた。

「お前を誘った俺が悪かったんだ。ああ、これは放射線障害つてやつだよ」

そう言うと、友人はゆっくりと腕をまくってみせた。赤黒い斑点が、手首あたりに散らばっている。

「放射線……」

「あの日雇い仕事で、黒い小豆みたいなペレットをかき出す作業をしただろ。きっとあれなんだ」

高橋は、志賀原発に付属する建屋での割りの良い仕事を思い出し

”宴”直後のこと。アメリカ・ロシア・中国では、割拠する軍閥が核兵器で潰しあった結果、汚染された荒野が広がっている。

ヨーロッパはロシア・中東から波状的に押し寄せる”奴ら”に数十年もさらされた結果、かろうじて生き残っていたコミュニティーの多くが滅亡した。結果として産業文明の再興は、ブリテン及びアイerland島以外では遅れている状況。

数世紀後、人類による第二産業文明は”宴”以前の水準を取り戻し、地球規模の気候変動を再び引き起こすことになるのだろうか？

いや、審判は一度下され、人類は血反吐を吐き、のた打ち回りながらも刑期を勤めた。同じ轍を踏むほど愚かではないと信じていたい。なぜなら、シベリアの永久凍土にはきつと、迷い込み囚われた”奴ら”が、少なからず凍りついて次の出番を待っているだろうから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6889o/>

宴のあと

2010年11月3日18時39分発行